

## 絵本の絵が語る価値への一考察

— 『ナイトシミー』の絵の分析を通して—

### A Study on the Value of Paintings Told by Picture Books

Through the Analysis of the Pictures in the Picture Book “The Night Shimmy”

松田 智子・大場 六夫

Tomoko MATSUDA and Mutsuo OHBA

#### 要旨 (Abstract)

絵本は「ことば」と「絵」からなりたつ視覚的芸術作品である。絵は一般的に見るものと理解されているが、絵はことばで表現できないものを読者に語りかける。本稿では、絵本の絵が表面上示していることや何を描いているかということを一步乗り越えて、直接描くことができないもの、雰囲気や考えや抽象的な概念などを、どのように表現しているかを丹念に分析した。具体的にはジェーン・ドゥーナンの著書『絵本を読む』の手法を参考とした。分析対象とした作品の絵は、イギリスを代表するポストモダンの作家アンソニー・ブラウンの絵本である。作家の表現する独自の象徴性を読み取る手法とともに、イギリスの伝統的古典的な絵の読み方も紹介した。

キーワード：右から左へ、抽象的モチーフ、作家独自の手法

#### I. はじめに

絵本は、基本的に「絵」と「ことば」から成り立つものである。最近は、「ことば」のない絵本も見られるようになったが、絵本の多くは「絵」と「ことば」の相互作用による力で、読者に語りかけてきたり心に何かを響かせてくる。一般的に我々は、絵本の「絵」は見るものであり、「ことば」は読むもの（読んでもらうもの）であると考えがちである。しかし近年、絵本では「ことば」は読むだけでなく見るものであり、「絵」は見るだけでなく読むものでもあると言われている。

なぜなら、「ことば」を読んでいるとき、紙面の絵とは異なったイメージが読者に浮かび上がることが、たびたびあるからである。また「絵」をじっと深く見ているうちに、「ことば」では提示されていない物語が聞こえてきたり、絵が直接に読者に語りかけたりすることもあるからだ。

絵本製作上の制約もあり、実際の絵本では物語の展開のすべてを、紙面上の絵で示すことはできない。それゆえ、絵本では「絵」と「ことば」の両者が、お互いに補完し合い助け合って、我々に語りかけることになる。「ことば」では語れないものを「絵」が示し、「絵」では示せないものを「ことば」が語るのである。これについて、絵本の力を構造的に分析したマリア・ニコラエヴァとキャロル・スコットは、次のように述べる。

ことばも絵も、読者がすでにもっている知識や経験、期待などで埋めなければならない“隙間”を残しているし、この“隙間”を埋めるにあたって、ことばと絵の相互関係には限りない可能性が見つかるだろう。(略)

ことばと絵はお互いの“隙間”をすっかり満たし合うこともあれば、一部だけを満たすこともある。そしてまた、ことばと絵の両方が相互に働き合う場合にも、そこには“隙間”が残されており、読者はこれを埋めなければいけない。そしてまた、ことばと絵の両方が相互に働き合う場合にも、そこに“隙間”が残されており、読者はこれを埋めなければならない。ことばも絵も、独立したものでありながら、それぞれがそれぞれの方法で、もう一方を必要としているのである。<sup>脚注1)</sup>

## II. 絵本の絵を読むとは

絵本の絵を読むとは、1枚1枚の絵を単独で観るのではなく、絵本の中の連続性のある絵を関連付けながら深く味わうということである。深く味わうには、ただ受け身で眺めているだけでなく、読者の方から何らかの働きかけが必要となる。絵本の絵については「目で見れば理解できる」という誤解が、広く一般的にある。絵に込められた深い意味を「読み取る」ためには、ただ目から入った情報をそのまま受け取るだけでは不十分である。しかし絵に描かれたシンボルが、本当は何を意味するかについては、絵が読者に直接に語りかけてくることはないだろう。それゆえ、読者が絵本の絵を真に読みとくためには、パズルを解くような姿勢で注意力と分析力を働かせて絵に臨む必要がある。

子どもにとり絵本の絵を見ることは、どのような価値があるかという質問に対する一般的回答は、日本と欧米では異なる。日本においては、色彩や形で子どもをわくわくさせてイメージ豊かに、絵本を楽しませることが大切だと言われている。一方欧米では、絵は文字を読む能力や言葉の発達を支援する教材という位置づけも重視されている。ジェーン・ドゥーナンは、これら2つの価値に対し、第3の価値を次のように加えている。

絵は圧倒的な表現力でもって絵本を“作品”に仕上げるものであり、作者の頭の中にあるものに形を与え、その形になったものに今度は子ども読者が自分なりの考えをつけ加えていけるというものです。このように考えた場合、絵本という作品を体験することこそ価値があるという意義があります。<sup>脚注2)</sup>

絵を見ることとは、視覚的芸術作品を体験するということであり、絵を見て自分の心に何かを想像して、それを自分なりに解釈することだと述べている。彼女は、読者が子どもであっても、絵を深く味わっていくと、その作家や絵本だけが持っている独特のスタイルに気づくとも述べている。子どもは同じ絵本を何度も繰り返して読むこと（読んでもらうこと）を好むが、毎回同じように受け止めているのではない。読んでもらうたびに、絵本のより深い意味に気が付いているのである。彼女は、むしろ我々大人が、子どものように絵本を読む能力を失いつつあると警鐘を鳴らしている。なぜなら、大人は文字によるコミュニケーションを重視しているので、絵本のあらすじの理解をことばに頼る傾向が強いからである。さらに大人は、絵とことばの両者でつくりあげられている絵本の全体像を無視し、絵を副次的な装飾とみなしてしまうことが多いからである。

## III. ジェーン・ドゥーナンの絵本の絵の読み方

ジェーン・ドゥーナンは、イギリスの絵本研究学者である。中学校の美術教師の経験もあり、絵本の絵に焦点を当てた論文を多く書き、自らの授業においても生徒とともに「絵本を読む」実践を行っている。本稿では、著書『絵本の絵を読む』で示されたドゥーナンの手法で、イギリスの絵本『ナイトシミー 元気になる魔法』（アンソニー・ブラウン絵、グウェン・ストラウ文、灰島かり訳）を読むことに挑戦する。

脚注1) マリア・ニコラエヴァ、キャロル・スコット『絵本の力学』玉川大学出版部 2011年 p9

脚注2) ジェーン・ドゥーナン『絵本の絵を読む』玉川大学出版部 2013年 p7

ドゥーナンの手法というのは、抽象的な作品論を展開するのではなく、絵本に示された絵そのものの連続性に視点を当てて、時間をかけて詳細に見ていくというものである。ドゥーナンの絵本の絵を読む手法について、著作『絵本の絵を読む』に沿って筆者松田が要約して以下に述べる。一方でドゥーナンは、すべての絵本が同じ読み方で読めるわけではないとも述べているので、筆者が要約した読み方がすべてではないことを、了解いただきたい。

### 1 何度もいいに読む

最初に、絵本を全部通して読むことで、絵本のユニークさに気づく。1回目は、絵とことばにさっと目を通して、絵本が何について語ろうとしているかをおおまかにつかむ。2回目にもう一度、ひととおりページをめくりながら、ことばと絵の組み合わせのパターンを分析的に見る。この再読の間は、つねに見開きと見開きの間にある隙間に深く思いを巡らせ、絵をくまなく調べて心に浮かんだことをメモに取ることが推奨されている。三度目には、もっともっとゆっくりとことばを読みながら、絵を眺める。

ここまでくると、急ぐことは禁物である。与えられた絵本の情報をしっかりと見据え、それが見る者に働きかけ、ついに見る者から絵本に対して、働きかけたくなるような気持になるまで待つことが重要である。このように絵を見た後、次にもう一度ことばを順にたどる。じっくり見るときには、線・形・色がどのように使用され、どのように構成されているか、画材は何でその効果はどうであるか、明示と暗示はどのように作用しているか等に注意をする。

### 2 絵本に繰り返し出てくるモチーフ等の発見

丹念に読み進み、ひとつひとつの絵を見ながら全体を見通して考えると、その絵本に繰り返し出てくるモチーフが見つかる。その絵本で使用されている色や様式が、何を表しているか、登場する様々なものの関係性はどうか、ことばと絵の組み合わせはどうか、これらがページの連続性の中でどのように働いていて変化しているかなどである。

多くの絵本の場合、絵はことばが意味しているものを詳しく見せ、豊かにし、拡大し、補足している。しかし、絵がことばの意味しているものと矛盾していることや、ことばの意味から感じるものと逸脱していることもあるという。絵本には、中心となる物語と異なったサブストーリーと一緒に進むことがあるので、全体を把握するためにはことばだけでなく絵の細かい点にも注目する必要があると述べている。

### 3 ページをめくる姿勢

視覚芸術において、ページをめくるという行為をとまなうのは、絵本独自の鑑賞形式である。ページとページをめくる間には、読者自身が読み解くことで埋めなければいけない隙間がある。そのために心を開いて、絵のすべてを受け入れる気持ちでページをめくる必要がある。しかし実際の読者は、ページをめくった後で、ことばと絵を通して様々な感情（納得・疑問・反発）が起こり、どう対処したらいいかわからないこともある。その時は、絵本から一歩距離を置いて、もう一度、最初から順を追って絵を分析するとよいとドゥーナンは述べている。

## IV. 『ナイトシミー』の絵を読む

### 1 表紙と扉ページ

表紙には、魔法使いの装束を付けたパジャマ姿のエリックことナイトシミーが、少し微笑みながら力強いポーズで夜空を飛んでいる。青と黒が基調の画面中、ナイトシミーの靴の朱色のような赤は夜空でひととき目立ち、この物語の重要な色であることを暗示している。また、ナイトシミーが顔を右に傾け読者と真っすぐ視線を合わせていることから、彼は絵本に介入する重要な登場人物であることが分かる。

表紙のページをめくるとどこまでも広がる紺色の夜空の見返しがあって、これは扉ページまで続いている。見返しをめくると、突然真っ黒な見開きの扉ページが現れる。見開き右ページには4つのドアが徐々に開いて、向こう

の空間が拡大する様子が一列に描かれている。左端最初のドアはぴたりと閉じられているが、右端4番目のドアは90度近くまで開いている。最初のドアの向こうには星のある夜空、次に混乱した光が現れ、最後は青空となっている。真ん中のドアの向こうには、青緑黄赤と色が連なり、今から何かが起きそうな気配を感じる。読者にそう感じさせるのは、下方の赤と黄色が炎を連想させながら、次に緑と青とまさに虹の階調が上がっているようで、非日常的な雰囲気漂うからだろう。まさにこのドア開放過程が、サブタイトルの「元気になる魔法」であろうか。

また、ドアが左から右へと開くという流れは、読者の視線の進行方向に沿っており、有効なページタナーとなっている。ページタナーは、絵は見る者・読む者に対し、ページをめくって「次に何が起こるか知りたい」という気持ちにさせる働きをもつ。絵本『ナイトシミー』の見開きと見開きの間には、これ以外の場所にも多くのページタナーの仕掛けがある。

## 2 見開き 1

この絵本の特徴は、絵の周りを取り囲んでいる大きな黒枠にある。見開き1では、これがとりわけ強調されている。左ページには絵もことばもないが、右ページは絵の周りは黒で大きく枠取りをされていて、絵は小さく中央に配置されている。その絵の中でも赤いレンガが大きなスペースを占め、さらにその中に緑色の窓枠がある。窓の内に閉じ込められた主人公の少年エリックが、うつむいて不安げに見える。エリックは薄い色彩で描かれ、影が薄く生気がないように見える。

重苦しい黒枠は、読者にエリックの心の孤独感を連想させる。この視点は、外部の語り手の視点であり、黒枠があるために、絵本全体が枠の中を覗き込むような構造になっていて、これは少年の心の中をのぞく構造と重なっている。また絵本全体の広い部分を占める黒色の枠が、魔法使いの世界に閉じ込められているような緊張感を漂わせている。

ことばは、エリックについて「口をきかない」、友達にからかわれ「いじめられている」、おとなから見ると「恥ずかしがり屋」と記しているが、絵はそれを補完し具体的に描写する役割を果たしている。窓には外のビルの影が映りこみ、そのビルの上方には、風の影が小さく舞っている。この風は、この話にくり返し出てくる重要なモチーフである。

## 3 見開き 2、3、4

ここはエリックの視点で描かれており、語り手は内省的な10歳ぐらいの少年である。絵はことばと違って、直接的には内面に焦点を当てることができないので、登場人物の性格や感情は、顔の表情、ページの中の位置、トーン、色など絵画的な技法で表される。エリックは小太りで眼鏡をかけており、シャツのボタンを首まできっちりと留めるような、少し神経質ないわゆる「おたく」の少年である。

エリックは周りの子どもたちとはコミュニケーションが取れず、「しゃべりたくない」から「しゃべるひつようなんか ない」と、空想の友達ナイトシミーに安息を求めている。この秘密の友達がエリックの代弁者として活躍するが、実は彼はエリックが魔法使いの装束を付けただけの同一人物であり、エリック以外の人には見えない存在である。

エリックをナイトシミーに変身させる魔法使いの3装束については、古典的な子どもっぽさが漂う。先端のとがった魔法使いらしい三角帽子とマント、そして目の周囲を隠すだけの仮面の3点セットは、ハロウィン用の子どもの変装道具のようである。この装束をつけて、エリックは自己の分身であるナイトシミーを演じている。

見開き左にはうつむいて縮こまるエリックが描かれ、右には魔法使いの装束を付けナイトシミーに変身した姿が描かれる。エリックの目線は下向きで閉じた状態から左上方向に大きく見開かれていき、体側にくっついた腕はナイフとフォークを構えて、テーブルの上に載ってくる。固く閉じられた口は大きく開き、話しかけるように右前に

傾いている。壁紙は白みがかった黄色だ。絵の具の黄色に白色を混ぜて使ったのか、あるいは透明絵の具の下から白い紙が透けて見える効果なのかは判別できないが、左ページは彩度が低く右ページは高い。右ページの壁に掛けられた絵の無表情な少女も、左ページではエリックと同様に魔法がかかったように活発に変化する。魔法はエリックだけでなく、周囲のものにもかかる。

見開き3でも黒い枠は続くが、左ページは右ページより黒枠の幅がぐっと狭くなる。ナイトシミーのエネルギーが、黒枠を押し広げたようだ。ことばでは「ゆめのなかで きょだいトカゲがおそってきても」「ナイトシミーがたすけてくれる」と記されている。左では、エリックが寝床の中で穏やかに読書をしているが、右では夢の中で巨大トカゲが彼を襲い、ナイトシミーがマントを広げ追い払う様子が描かれている。絵本は左から右への動きを基本にして進行するが、トカゲとナイトシミーは進行方向とは逆向きに描かれている。絵本読者の目は左ページを先に見てから続いて右ページに移る。これは横文字の流れと同じである。絵本においても、この左から右に動く方向は進行方向と合致した自然な流れといえる。そのため反対向きに動くポーズは不自然となり、登場人物が不愉快なときや悲しいことなど負の感情が起こるときなどに使われている。エリックの体から分離したナイトシミーは、実体のないものとして扱われているため無彩色で描かれており影がない。またここでも、部屋の背景がエリックの心理描写に使われている。巨大トカゲの夢では、暖かい黄土色の壁が細かい虫がうごめくような模様になり、ベッドボードの飾りの球体までもが巨大トカゲの目に変化している。

見開き4では、また黒枠は狭くなるが、わずかであるが描画画面は見開き2よりも拡大する。右にはエリックに話しかける父親が登場するが、視線はエリックなので父親の姿は上下で断ち切られている。右では、エリックと透明人間のナイトシミーが「シミー語」で話すと記されており、絵ではエリックはもっぱら聞き役である。左の父親と話す場面の壁紙には口の装飾が施され、右のナイトシミーの超人的能力を示す場面では壁紙に目の装飾が施されている。目の模様の壁紙は、次のページのマーシャの気配につながる伏線であり、背景の壁紙はページタナーの役割を持っている。壁の下幅は部分フォルムとなって、2人の関係の安定性を示している。

左から右へ枠の形態（形や大きさ）で読者の読む速度に緩急をつけるとともに、テーブルの模様やフローリングの木目で遠近法を使い、読者の視線が登場人物に自然と集まる構成である。また、見開き1から4までは、ことばに重複させて絵の背景も作用させ、登場人物の性格を説明する手がかりとしている。

#### 4 見開き5、6、7

見開き5、6、7では、左は白地に黒文字、右は黒枠が見開き3と同様に狭く描かれている。つまり、黒枠が狭くなり、エリックの心が開く契機になる場面である。

見開き5の左は、登場人物マーシャの設定とエリックの関係性をことばで説明をしている。「気にしない」「しつもんしない」マーシャを離れた木の陰から覗き見するエリックの後ろ姿と、振り返るマーシャの視線が合う。絵は一点遠近法が使用され、草むらに転がる赤い空き缶や石ころが、2人のそれほど親しくないという距離感を表す。なお、マーシャの首であるが、筆者大場には、体からずれており不気味に見える。この姿勢が筆者に、マーシャが実在の人物ではなく想像上の人ではないかとの疑念を持たせる。

マーシャの上げる彩度の高い赤青黄色3原色オウム尻から延びる糸は、絵の進行方向と逆向きに張られている。そして右端には左下から右上に走る大きな道路が走り、ページをめくっても2人の関係がつながっていくことを予感させる。

見開き6では、前ページの予感通り2人の関係性は、一気に縮まる。この見開きの間に、2人にどのようなやり取りがあったのか、読者が自由に想像する劇的な転換点の一つである。マーシャとの関係が現実であるか、願望なのかは、読者にはわからない。ことばでは、マーシャと一緒にエリックがサルのようにリンゴの木に登り、そのあ



と空から色が消えるまで長いこと遊んだりしたことが記されている。

不気味なほど数が多いリンゴの赤と補色である緑の葉、リンゴの木に巻き付く蛇の姿、まるで旧約聖書のアダムとイブの楽園のようである。ちなみに旧約聖書では、蛇とトカゲは同一の邪悪な象徴と扱われている。背景のグラデーションが効いた黄色は、エリックの高揚する心を表す。リンゴの木の根元には、彼を擁護するべき魔法使いの装束が脱ぎ捨てられている。

ここで初めて風の形が「オウムのたこ」であることが、ことばで説明される。「空から だんだん 色がきえる」ほど「ながいこと」風をあげていたが、「とうとう」マーシャが帰ってしまう。「とうとう」ということばに、エリックのがっかりする気持ちが表れている。夕暮れの薄暗さの中に、左下から右上に上がる3原色の風が、ぐんと高く上がっていることは、地上の木と月と左端の3つの雲の大きさをクローズアップされている。また、全体的に落ち着いた青色の色調の中で、暖色の赤と黄色のオウムの風は、前方にせり出しているように見える。

旧約聖書の絵画では、オウムは善の象徴としてアダムとイブの傍に描かれている。ルーベンスの宗教絵画「アダムとイブ」等に代表されるように、彼らが楽園から追放される場面に、よくオウムが登場する。宗教絵画に登場するオウムは、飛ぶことはなく、アダムとイブを木の上から見つめるだけである。風のデザインが鳩ではなくオウムであることは、この絵本が旧約聖書のストーリーと関係しつつ進行することを暗示する。

見開き7では、エリックがその晩は豆も残さなかったしお風呂にも入ったと、ことばで説明される。彼が苦手なことを乗り越えて成長していることが分かる。しかし、黒枠と青いタイルに囲まれた疲れたエリックの表情から、不安感が見て取れる。風呂場の窓にかかる3色のカーテンは、揺れ動きつつ成長するエリックの心中を、善の象徴であるオウムと重ねている。

それからエリックは眠るが、赤黄青の3原色の天井まで届くほどの巨大なオウムが、彼のベッド枕元左側にぴたりと寄り添って立っている。オウムの目は部屋全体を見張るように鋭く描かれ、巨大トカゲとの対決に備えにらみを利かせているようだ。さらに、エリックのベットサイドの机には、かじられたリンゴの芯とオウム模様のコップが置かれている。エリックは蛇が絡むリンゴの木の実を、食べてしまったようである。旧約聖書では、アダムとイブは蛇にそそのかされてリンゴの実（善悪の木の実）を食べてしまい、原罪を背負うことになる。部屋の絵画には、オウムを連れた大人により、少年が引っ張られ無理に追放されそうになる絵が描かれている。エリックが背負う原罪は、何だろうかと心が騒ぐ。

部屋全体の画面は安心感を表す緑の色調で表現され、壁は薄緑で柔らかく、影や床やカーテンは彩度の高い緑で描かれている。この見開きの枠組みと、同様な枠組みが配置されている箇所が見開き2である。その見開き2と比較すると、エリックの落ち着いた心理状態が緑の色調と巨大オウムの3原色で表現されている。また、ベッドヘッドの木枠の丸いトップもオウムの頭形になっている。丸いトップは巨大トカゲの目になったり、オウムの頭にも変化したり、いかにも魔法がかかっているようだ。「きょだいトカゲのゆめは 見なかった」理由を見開き右は語っている。

## 5 見開き 8、9、10

見開き8、9、10は、魔法使いの装束を付けずにマーシャと遊んだ次の日に、エリックがナイトシミーを失ってしまい、パニックを起こすところである。善悪の知恵の実であるリンゴを食べてしまったエリックに背負わされた原罪は、彼の守護神であるナイトシミーを失うことだったのかもしれない。

見開き8と9は青い色調で描かれているが、これはナイトシミーがいないエリックの心の戸惑いと不安感を表している。両見開きとも、左右の関係性は、エリックの感情とそれに基づく行動という因果関係である。見開き8では、ベッドの下を覗き込むエリックと読者の視線がぴたりと合うように描かれ、読者もエリックの不安に引き込

まれそうになる。エリックの口が半開きなのは、彼がベッドの下に何かを見つけたのだろうか。

見開き 9 では、エリックは怒りから自分の大切なもの（プラモデル、本、ぬいぐるみ等）を、壁にぶつけてバラバラに壊したり引きちぎったりしている。画面左下には、腕を組んで険しい顔で立ち尽くすエリックが描かれている。進行方向と逆向きの立ち位置が、彼の不機嫌さを強調している。また、稲妻が光る中央の窓外の赤黒い背景も、彼の諦めと悔しい心理表現を補完している。

見開き 10 では、左にエリックを遊びに誘うマーシャの顔が、黒枠の中にクローズアップされている。前見開きから継続する青色の扉を開けて、黄色の光を背景にマーシャは「いっしょに あそぼう」と声をかける。マーシャの顔は左向きで、前ページのエリックに呼びかけている。ここも、めくるという連続性を考えた見事な色使いと配置である。マーシャが光を背に左向きに語ることは、閉じこもるエリックへの強い働きかけを意味している。マーシャはカラフルな服を着て、ゆれる長い髪を光に反射させた、積極的な少女である。右では誘いを拒絶して引きこもったエリックが、眉をしかめてマーシャとは反対方向を向いて座り込んでいる。2人の視線の向きが反対であることが、心の隔たりを象徴している。右では、扉を締め切った部屋を、さらに両端から分厚い2枚の扉と黒枠が閉じ込めている。マーシャは黄色を主とした鮮やかな色彩であるのに対し、エリックは背景とともに暗く描かれ、色相で登場人物の心理を描いている。

## 6 見開き 11、12、13

3つの見開きは、左は白地に黒文字、右は絵という構成である。

見開き 11 の左では、エリックはマーシャの尻が木に引っ掛かった様子を窓から見て、取ってやりたくなる。彼が閉じこもっている部屋はうす暗く、重たいカーテンを少し開けた隙間から白い光が差し込んでいる様子が点描画で描かれている。窓の外をのぞくエリックの背中まで、白い光が伸びている。

「木のてっぺんまで のぼって行って、たこを おろした」と、エリックの行動がことばで記されている。ついに、エリックは、ナイトシミーの助けなしで、自ら行動を起こしたのである。エリックが自己の殻を破り行動を起こし、苦労して木に登り、尻を取る場面はこのお話のクライマックスとなるわけだが、この部分は全く絵にはなく、読者の想像にゆだねられる。右に描かれているのは、3原色の大きなオウムの尻をつかんだエリックの右手だけである。ここに至るエリックの心や行動の変化の過程は、ことばからも絵からもカットされている。

見開き 12 では、絵本の副題である「元気の出る魔法」が起こったのだろうか。ことばでは「ふたりは シャベリはじめた」と記されている。ついに画面から黒枠が取り外され、画面いっぱいに清々しい色彩が広がっている。エリックは、マーシャに向かい、両腕を前に突き出して前のめりで熱心に語り掛けている。場面の手前には不要になった小道具である魔法使いの装束が脱ぎ捨てられていることから、エリックにとりナイトシミーは必要がなくなったと言える。

2人の周囲は、太古の遺跡であるストーンサークルのように、木々の影が広がり神秘的な円環をなしている。2人の真上から不思議な白い光がスポットライトのように降り注ぎ、彼らを照らし出している。この光が地面に反射して、まるでキリスト生誕の絵画のような神々しさである。木の枝には、合計11羽ものオウムが止まっており、特に中央の2羽は対称をなしており神秘的な2人の光景を見守っているようだ。旧約聖書ではオウムは善の象徴であり、さらに話す鳥なので、11羽もいると「なんて いっぱい、しゃべることが あるのだろう」ということばを、絵で補完しているわけだ。また、画面全体に広がる緑の補色であるオウムの赤色は、画面を彩りつつ引き締めている。振り返ると、この暖かい赤色は表紙から続いており、エリックの靴下、オウムの頭から胸の羽、すずなりのりんごと、ずっと幸運の色だった。

画面の後方右側に、公園の街灯にとまったオウムに話しかけるゴリラが描かれている。街灯は、この場所がエリッ

クの家近くの公園であることを示すが、その風景は日常とはかけ離れ、奇跡的な空気に満ちている。突然出現したゴリラは、アンソニーの絵本ではおなじみのキャラクターであり、彼にとっては信頼と愛情の象徴である。

見開き 13 では、エリックが大きな成長をとげ、いよいよ終わりに近づく。子どもたち 2 人が、進行方向へ疾走しながら風あげをする場面である。最初のページで、エリックの後方に小さな風が上がっていたことを述べたが、このオウムの風は、サブストーリーである旧約聖書物語とエリックやナイトシミーをつなぐのはもちろんのこと、絵本全体の強力なモチーフとなっている。そのため地上の人物とオウムの風の大きさを比較すると、風がかなり大きく描かれているのだろう。2 人は前から風を受けながら、絵本の進行方向つまり明日に向かって走っている。絵本に風の上がる場面は今までに 2 回出てきたが、いずれも進行方向とは逆向きに右側に飛んでいたことを思い出してほしい。背景には月と星が描かれているので夜であるが、前ページと同様に上方から何本もの光の筋がシャワーのように降り注ぎ、昼間と見間違えるほどの明るさである。

## 7 終ページ

最後のページだけに、エアーフレームが使われているのが非常に印象的である。絵本の流れは、強い黒枠と枠無しとのページを繰り返しながら、最後は夢のようなやわらかいエアーフレームでぽかされている。読者からすると、何か遠くの方を見ているような感じがする。もう必要なくなった魔法使いの装束だけが、エリックと分離して空中に浮かびあがり、「バイバイ」と挨拶を送っている。単独で意思をもっているように動く魔法使いの装束は、エリックが現実世界から逃避し楽園にすむための、単なる小道具だったとは思えない描き方である。魔法がかかり、何か強い意志を宿しているようである。このページの背景を見ると、前ページが続いているような空間が描かれ、ナイトシミーは彼らに進行方向の手を高く上げて、後押しをしている。

## V. アンソニー・ブラウンの絵の特徴

絵本作家アンソニー・ブラウンについて、藤本朝巳は彼の絵の独特の展開方法は、「背景の遊び絵」、「文章と絵の基本的な配置、すなわち基本的なページ運び」「独特の枠絵」の 3 点にあると述べている<sup>脚注 3)</sup>。この 3 点について、絵本『ナイトシミー』を振り返る。

まず「遊び絵」についてであるが、エリックの家の壁紙の模様や壁に掛けられた変化する少女像があげられる。また、エリックの部屋の壁の絵にオウムの風や追放されそうな少年が描かれていたり、ベッドボードにかじられたリングがさりげなく置かれていたりする。クライマックス場面で突然にゴリラがオウムに話しかけたりするのも、いわゆる「遊び絵」といえる。

次に、「基本的なページ運び」について振り返る。彼はイギリス絵本の伝統的な手法である左から右への進行方法をきちんと守り、小道具による伏線をページタナーとして有効に活用している。例えば、マーシャを見つける前の壁紙には目があり、ナイトシミーが要求を述べる時の壁紙には口が描いてある。エリックとナイトシミーの個性の違いも、魔法使い 3 点セットを使いながら、食事や就寝の場面を取り上げて見開き右左で描き分けている。風や登場人物の動きの方向が、右から左へと逆向きの時は、エリックのマイナス感情を表現している。

最後は、表現したい内容に応じたアンソニーの「独特の枠絵」について述べる。この絵本では、枠の形は長方形に限られているが、主人公エリックの心の呪縛と開放が、黒色の枠の幅で表現されている。また、不安や怒りなど負の感情が高ぶったときも、枠はぐっと押し広げられている。

脚注 3) 藤本朝巳『絵本の愉しみーイギリス絵本の伝統に学ぶー』平成 18 年国際子ども図書館児童文学連続講座講義録 国立国会図書館国際子ども図書館 2007 年 p132



## VI. おわりに

アンソニー・ブラウンの『ナイトシミー』の水彩画を読み解く作業を通して、絵本を読むことの価値を具体的に論じてきた。本稿のテーマである「絵本を読む」とは、絵本の絵は単に読者に絵を示すだけではなく、絵が文章のように何かを語りかけるということである。本稿では絵本『ナイトシミー』の絵を分析し、筆者松田・大場が話し合い、ことばでは表現できない雰囲気や象徴を読み取ってきた。

一方絵本のことばは、単に文字で語るというだけの役割ではない。ことばは読者を絵に이지ない、絵により自由に想像しイメージを膨らませる役割を持っている。つまり、ことばもある種の物語る絵であるともいえる。今回明らかになったように、絵とことばの機能は別々に起こるのではなく、必然的な関係性があるからこそ起こる。つまり、ことばでは語れないところを絵が補い、絵では示せないところを言葉が補う関係である。

絵本それ自体はものにすぎないが、読者は絵本の絵やことばを読みとり、それらの語りを受け入れ、自分の中に何かを残すことができる。絵本はテレビ等と違って、人が自分の手でページをめくらないと読むことができない。子どもであれば、大人の声で読んでもらわないと読むことができない。今日ほど情報化が進んだ時代においては、めくるという作業は非常に原始的な方法に思えるが、一人一人の読者の想像やイメージの速度や内容を重視した温かみのある行為である。

子どもがイメージ豊かに絵本を楽しむことが第一とするなら、本稿のような深読みした絵の解説は不要かもしれない。しかし、作品を楽しんだ後に、なぜ面白いのかと専門的に考えて見直すと、こんな仕掛けがあったのかと分かり理解が深まることは意味がある。例えば、エリックとマーシャの出会いと救いを、旧約聖書のアダムとイブに見立て、サブストーリーとしてオウムとともに潜ませていることに気づくことである。しかし、この絵本を旧約聖書のアダムとイブに、関連づけて楽しめるかどうかは、読者の知識と経験にかかっているといえる。

読者が絵本作品の異化に気づき、作家独自のアイロニーを楽しむことができれば、絵本の読み方がさらに深くなっていくのではないだろうか。絵本に関わる者が、このような読み方もあることを体験することにより、読み聞かせの在り方も深みを増す。

## 文献 References

- 1) アンソニー・ブラウン絵、グエン・ストラウス文、灰島かり訳『ナイトシミー 元気になる魔法』 平凡社 2002 年
- 2) 生田美秋、石井光恵、藤本朝巳『絵本入門』 ミネルヴァ書房 2013 年
- 3) 生田美秋、藤本朝巳『絵本を読み解く絵本入門』 ミネルヴァ書房 2018 年
- 4) ジューン・ドゥーナン『絵本の絵を読む』 玉川大学出版部 2013 年
- 5) 灰島かり『絵本を深く読む』 玉川大学出版部 2017 年
- 6) 藤本朝巳『絵本のしくみを考える』 日本エディケーター出版部 2007 年
- 7) 松居直『絵本を読む』 日本エディケーター出版部 1983 年
- 8) マリア・ニコラエヴァ、キャロル・スコット『絵本の力学』 玉川大学出版部 2011 年

